

中盤戦を迎えた四国地区戦。完全ドライでタイトルレースも白熱！



開幕戦で不覚の一敗を喫したN2クラス橋本充弘選手だが、前戦に続いて優勝を果たし、復讐をアピールした。

JAF四国ダートトライアル選手権の今年のシリーズを折り返す一戦が5月19日に開催された。当日の天候は快晴。大会前も降雨がなかったため、ヒート1から激しく砂埃が巻き上がる見応えのあるバトルが展開された。

四国地区戦といえば、ともにトップドライバーとして君臨する二人の「谷」選手が有名。別に兄弟ではないが、時には同じクラスで覇を競

い、別々のクラスを走る時でも総合の順位を競い合うという良きライバル関係にある。

まずN1クラスにエントリーしたアスティを駆る谷芳紀選手はヒート1の2分21秒928のタイムで逃げ切って、順当勝ち。しかしヒート2ではパイロンタッチでタイムアップならずとあって、「2本目は練習不足が目立つ走りになってしまいました。もう一人の谷さんには勝てなかったんですが…」と今回は苦笑の一戦に。

一方のSD1クラスにエントリーの谷正史選手も「2本目はグダグダの走り。オーバーランはするし、パイロンは止まりかけるし、ダメでした」と言いつつも、2分19秒902のタイムを残して優勝。「谷決戦」を制した。

「タイムは思ったより出たけど、18秒台はいけた。前回は2本目でリタイヤして負けて、最終戦も出られないかもしれないので、ポイント考えるところ後がないから必死で走りました」と

正史選手は安堵の表情を浮かべて



1.SD1はタイトル防衛を狙う谷正史選手が今季初優勝。2.SD1辻本将真選手はチームメイトとの5位争いを制した。3.SD1で6位入賞の乾令樹選手。4.前回、SD1を制した萩原豪選手は連勝ならず、2位。5.SD1松原浩一郎選手は僅差の3位に。



6.一旦は逆転を許すも貴様を見せて優勝のSD2 梶田昌弘選手。7.N1クラスは谷芳紀選手が今季も好調を維持して3連勝。8.N2松原宏選手はタイムアップならず、2位。9.SD2期待の若手、豊田薫選手は2番手を獲得。10.N1の2位にはブーンX4の田川知明選手が入賞。11.N1クラス入賞の皆さん。12.N2クラス入賞の皆さん。13.SD1クラス入賞の皆さん。14.SD2クラス入賞の皆さん。15.SD2で4位入賞の上谷英男選手。16.ベテラン平尾高王選手はSD2で5位入賞。17.四国唯一のレディス武田有加選手はSD2で6位入賞。18.インプレッサで孤軍奮闘のSD2 豊田進也選手は7位獲得。19.マシントラブルで2本目走れなかったSD2 岩見文輝選手は8位にとどまった。20.CLクラスは塩岡大輝選手が優勝した。21.今季はSD2にスポット参戦しているラリースト長江修平選手は3位ゲット。22.N2開幕戦の覇者、吉川直毅選手は3位にとどまった。23.スターレットで今季から参戦の石井雅行選手がN1で3位入賞。



いた。

N2クラスは第一人者、橋本充弘選手がヒート2、自らの暫定ベストを1.5秒詰める2分12秒165のタイムで優勝し、2連勝を飾った。「10秒台はいかないとダメですね。狙ってたけど今日は自分に負けた感じです」と橋本選手。「前回の前に8年ぶりにオーバーホールしたら、動きが変わってしまって、何かしっくりこないんです。ここの路面も最近土を入れたのかカフカカの所が増えて、走りにくくなってるんですけど、そこをうまく走るのがドライバーです

から。難しくなった分、また走り甲斐のある路面になってきたと思うんで、次は攻めの走りをしたい」と気持を新たにしていた。

SD2クラスは今回も最多のエントリーを数えたが、ヒート1は絶対王者、梶田昌弘選手が2分12秒835をマークする。2番手にはN2の橋本選手の弟子でもある豊田薫選手がつけるが、2分17秒235と遠く及ばない。

ヒート2に入ってもこのベストは更新されず、梶田選手がウィニングランで締めるいつものパターンかと思われたが、奮起した豊田選手が2分12秒018でベストを更新。梶田選手は広場から外周へ抜けるセクションで大きく振られロスするが2分9秒817で再逆転を飾った。「頑張りました！こういう日はなかなかタイムが上がらないので、今日は1本目勝負のつもり

で走ったんですけど、2本目も逆転されたのが分かってたんで、気合入れたら、とっちらかってしまっ(笑)。路面が滑るんで苦労したけど、ゴールして見たらいつもスノーにしているACDがターマックモードになってました。回りがジワリジワリ速くなってきたので、面白くなってきましたね」と梶田選手。

その梶田選手を一時追い込んだ豊田選手は、「梶田さんの1本目のタイムを2本目で逆転できたのは初めてです。2本目は空気圧やセッティングも変えて1本目抑えたところも攻めました。立ち上がりでうまくトラクションもかけられましたね。やっと師匠(橋本選手)に追い付けた感じですが、大先輩(梶田選手)に少しでも近づけるために今後も頑張りたいです」と若手の走りをアピールしていた。